)

サグラダ　ファミリア　Sagrada Familia（Web 版）

カトリック水戸教会会報 2019 年 12 月号

待ち望む

カトリック水戸教会主任司祭　ウィリアム・ドネガン神父

待降節とクリスマスは、世の救い主であるイエス・キリストがいらっしゃるのを待ちながら、自分自身の準備をする時です。幼子イエスは馬小屋で生まれました。なぜなら母マリアとヨゼフはどこにも部屋を見つけることが出来なかったからです。幼子が来たのは、神が私たちを愛し、世に平和をもたらす救い主を約束し、どのように神を愛し神に仕えるかを私たちに教えるためです。

天使がイエスの誕生を告げた時、羊飼いたちは驚きましたが、一番先に訪問してイエスに会いました。神様が私たちを愛しているので、幼子イエスが生まれたということに私たちも驚きます。

私たちのイエスへの贈り物は何でしょうか？どのようにマリア様にあいさつしますか？ひとり子であるイエスという素晴らしい贈り物をしてくださったことに、神様にどのように感謝しましょうか？

クリスマスは 12 月 25 日ですが、私たちは一年中毎日、この奇跡と神秘を祝います。

皆さまにとって、喜ばしいクリスマスと幸せな新年になりますように。

ようこそ！　フランシスコ教皇

「すべてのいのちを守るため」というテーマのもとに、フランシスコ教皇が 11 月 23 日に来日、カトリック信者の麻生財務相らの出迎えを受けた。

24 日には長崎を訪れ、「焼き場に立つ少年」の写真を傍らに掲示して、「核兵器から解放された平和な世界。・・・この理想を実現するにはすべての人の参加が必要です。・・・核兵器は今日の国際的、または国家の安全保障への脅威から私たちを守ってくれるものではない」と話された。長崎野球場では韓国の被爆者も共に参加して約 3 万人でミサがささげられた。

★典礼用シンボルマークについて

オレンジ色のいのちと愛が十字架の中心かほとばしり、太陽のように全宇宙へと光り輝くとともに、緑の大地と青い海に抱かれて息づいています。

十字架はまた、造られた「すべてのいのちを守るため」に永遠に立ち続けておられる、復活のイエス・キリストの姿でもあります。

広島では、「兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるでしょうか」と述べ、平和な国際社会を築くために武器を手放すよう呼びかけられ、自己や自国の利益だけを追い求めることに対し、警鐘を鳴らしました。

25 日には、東日本大震災被災者との交流会に参加。「(地震、津波、原発事故の) 三大災害後の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心をあたかもひとつであるかのように一致させなければなりません」と述べれた。

青年との集会では難民申請者も招待され、教皇が強く訴えたのは、誰かを排除し分断や対立をあおるのではなく、人の尊厳を守る寛容さが重要とのことだった。

天皇陛下との会見では、「次の戦争は水を巡る戦争と言われています。重要なのは人々が環境問題に強い関心を持つことです。」と述べられた。

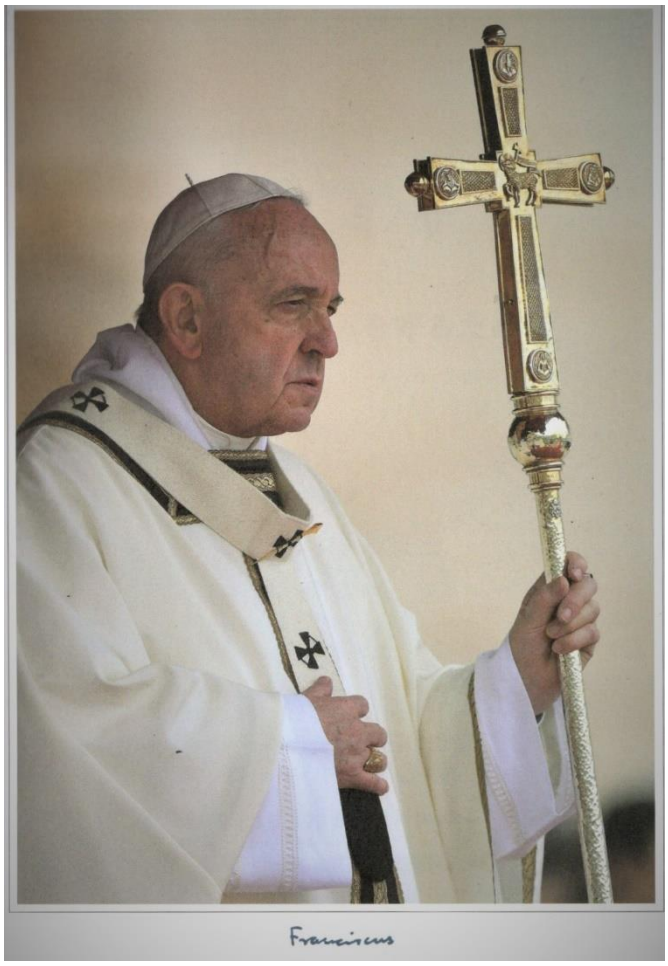
東京ドームで行われたミサは、他宗教の方々。裁判のやり直しを求めている、死刑囚・袴田巌さん。赤ちゃん、小学生から大学生、障がい者、共同祈願では 6 か国語で祈りがささげられ、多国籍の方々約 5 万人そしてドームの外で会場に入れなかった方々、全国の各教会でライブ発信の映像で共に一致してミサがささげられた。

教皇様の説教内容は、『回勅　ラウダート・シ－ともに暮らす家を大切に』に集約されると思いますので下記に記します。

安倍首相との会談では、「核戦争の脅威で威嚇することに頼りながら、平和を提案できるのか」と、米国の核の傘に入る日本を暗に批判した。

最終日の 26 日には、上智大学への訪問。「公正で人間的であり、手本となるような責任感のある行動を起こす者であること、積極的に弱者を擁護し、誠実さを示す者であることが必要とされています」そして貧しい人を忘れずに社会に尽くすよう学生らに呼びかけられた。私のためにも祈ってください、とも。

「全ての日本人の温かい歓迎に感謝する」として、4 日間の日本滞在に謝意を示し、バチカン市国へと帰国の途につきました。



わたしたちの地球のための祈り

全能の神よ、
あなたは、宇宙全体の中に、
そしてあなたの被造物のうちでもっとも小さいものの中におられます。
あなたは、存在するすべてのものをご自分の優しさで包んでくださいます。
いのちと美とを守れるよう
あなたの愛の力をわたしたちに注いでください。
だれも傷つけることなく、兄弟姉妹として生きるために、
わたしたちを平和で満たしてください。
おお、貧しい人々の神よ、
あなたの目にはかけがえのない
この地球上で見捨てられ、忘れ去られた人々を救い出すため、
わたしたちを助けてください。
世界を貪るのではなく、守るために
汚染や破壊ではなく、美の種を蒔くために
わたしたちのいのちをいやしてください。
貧しい人々と地球とを犠牲にし利益だけを求める人々の
心に触れてください。
それぞれのものの価値を見いだすこと、
驚きの心で観想すること、
あなたの無限の光に向かう旅路にあって
すべての被造物と深く結ばれていると認めることを、
わたしたちに教えてください。
日々ともにいてくださることを、あなたに感謝します。
正義と愛と平和のために力を尽くすわたしたちを、
どうか、勇気づけてください。

教皇フランシスコ著『回勅　ラウダート・シ–ともに暮らす家を大切に』

『東日本大震災被害者との集い』

会場のベルサーレ半蔵門に近づくと警察の車輌が多くなり、タクシーもどこに止まっていいか迷っている。

降りると「被災者の集いに出席の方はこちらです」と大きな声、そちらに向かうとすでに行列ができていました。どうやら階段を上がるようで、それから３０分以上かけて登って行きました。

会場に着くと「奥のドアが空いています。奥へお進み下さい」という声、一人一人バックを開け金属探知機でチェックを受け、やっと入場することができました。
やれやれ席をとって、トイレに行く席にもどる時もまたチェック。なんだかすごい所へ来ちゃったみたい。

幸田神父様はパパ様を福島にお招きし、相馬野馬追の会場で教皇ミサ行うをのが夢だったと言われました。
それは原発事故被災者の元に長年通い続けた私達の夢でもありました。原発事故被害者には特別な祈りが必要だと感じていたからです。また教皇とは、どんな人かも話されました。来場者の中にカトリックとの関係がない方もいたからです。

三人の被災者から証言がありました。パパ様は一人一人の手を握り声をかけられました。「あなたの声を聞きたかった。あなたに会たかった」そんなお気持ちを全身で表しておられました。

会場でなつかしい顔に出会いました。初めていわきの「もみの木」に行った時、ポッンと座り込んでいた信者さん。漁協で働いていましたが職場も職業も奪われ、被災後一年たって呆然としていました。

「三重の災害と」パパ様はおっしゃいましたが原発事故の被害者は、回りの市民から「遊んでくらせていいね」と冷たい目で見られる四十の災害の日々を送ってきました。

その後彼が晴れやかにパパ様と握手していました。彼の姿に心の中で言いました。

「生きていて良かったネ」と

教皇ミサ・パブリック・ビューイング

教皇フランシスコはその素晴らしい人柄と霊性から絶大な人気があり、教皇ミサに申し込んで抽選に当たった人は応募者の半数以下だった模様です。そこで水戸教会では、教皇様の東京ドームでのごミサのパブリック・ビューイングを行いました。他教会を含め約 40 名の方々が参加されました。水戸教会パブリック・ビューイングでは単に動画を見るのではなく、聖歌を歌う時は一緒に立って歌い、さらには聖体拝領の場面では臨時の聖体奉仕者によって聖体拝領を受けました。水戸にいながら心は東京ドームで司式をされているパパ様とつながり、ごミサにあずかっていたと思います。

感謝の典礼では、5 月から数か月間お世話になったホルヘ助祭様が堂々とパパ様への奉仕をされていて、水戸教会教会員一同大変うれしくなりました。

ミサの冒頭と終わりの方でパソコンのトラブルにより一時接続が切れましたが、パパ様の説教や聖変化の場面など重要な部分はすべて一緒に参加することが出来、とても恵みにあふれた時間を共有することが出来ました。

教会員一同で智慧を出し合い力を合わせれば、素晴らしいことが出来るということが実感できました。

待降節黙想会

テーマ：**「待降節：いつくしみと喜びの時」**

７日(土)	18:30～	ミサ(説教)	ゆるしの秘跡	
８日(日)	９：３０	～ １０：３０	ミサ(説教)	
	１０：４５	～ １１：４５	第一講話	信徒会館にて
	１１：４５	～ １２：３０	昼食	
	１２：３０	～ １３：３０	第二講話	聖堂にて
	１３：３０	～ １５：００	ゆるしの秘跡	

指導司祭：ｱｲﾀﾞﾙ ﾎｱﾝ ｶﾙﾛｽ　(Haidar Juan Carlos) 神父

イエズス会（上智大学神学部教授、ＳＪハウス院長）

アイダル神父は１９６５年、アルゼンチン生まれ。８３年にイエズス会に入会し、９６年、上智大学神学部神学科を卒業するとともに、聖イグナチオ教会で叙階された。９８年に上智大学神学研究科を修了し、２００２年にスペインのコミリアス大学哲学研究科で博士号（哲学）を取得している。教皇フランシスコもアルゼンチン出身で、同国のサン・ミゲル神学校でアイダル神父は、現在の教皇（当時はホルヘ・マリオ・ベルゴリオ神父）から４年間、指導を受けた。カトリック新聞にローマ教皇について投稿された記事が載っています。

前教皇ヨハネ・パウロ 2 世とベルゴリオ枢機卿（現教皇）とアイダル神父

イエズス・マリアの聖心会司祭叙階とセブ島巡礼

しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように（マルコ 14:36）

10 月 18 日～22 日、イエズス・マリアの聖心会司祭叙階とセブ島巡礼に参加しました。私が初めてフィリピンを訪れたのは、2016 年 10 月に行われた「フィリピンの『イエズス・マリアの聖心会』を訪ねる旅」への参加でした。各教会から合計 24 名が集まり、フィリピンでの聖心会の活動を見てきました。2 日目に交流会があり、神学生と神父様たちが私たちを迎えてくれました。イベントの司会はブラザーホセ・マリア・トリニダッド（JM)が、そして突然の依頼で私も司会を手伝うことになりました。これが、JM 神父様との出会いです。それから様々な交流を重ね、私にとって彼の司祭叙階が大切なものとなっていきました。そして今回の巡礼でとうとうその時がやってきました。司祭叙階式の行われた聖ロザリオ教会は、彼の故郷であるネグロス島サガイシティにあります。わたしたちは滞在先のパコロドからサガイシティまで２時間バスで移動しました。行けども行けども続くサトウキビ畑、初めて見る光景なのになにか懐かしさを感じつつ無事教会に到着しました。多くの列席者を

迎え、荘厳な雰囲気と共に明るく喜びがあふれた中で司祭叙階式が執り行われました。その後は地域の人が全員いるのかと思うようなパーティーが開催され、ブラザーたちが新しい司祭のためにダンスを披露したり、地元の学生たちもダンスで盛り上げてくれました。わたしがフィリピンにいくたびに感じるのは、皆さんが共に楽しみ、喜びを分かち合うことをとても自然に行っていることです。コミュニティーの中心として存在する教会に祝福を感じます。巡礼の恵みを糧に自分のすべきことを考える旅となりました。

ドン・ブライアン神父　叙階式

2019 年 11 月 4 日(月)水戸京成ホテルにおいてドン・ブライアン神父様の叙階式が執リード行われました。フィリピンからローマからたくさんのお客様が来られ、総勢 450 名の参加者、山野内司教様の司式により荘厳な感動的な式となりました。

会場は、フィリピンの民族衣装や着物を着る女性たちで華やかに彩られ祝賀ムードにあふれていました。

祝賀式もたくさんの出し物が目白押し、みこころ聖歌隊の歌や茨城青年会によるドン・ブライアン物語、フィリピンの方々の歌や踊りで最高に盛り上がりました。

ドン・ブライアン神父様は、大の日本好き、ご兄弟もみな日本の大ファンとの事。

信仰熱いご家族の中で育ち、司祭職を目指していたブライアンさんにフィリピンで出会った本間管区長が「日本に来ませんか？　Yes or No？」と聞かれ即座に Yes と答えたというブライアン神父。　日本とフィリピンの素晴らしい懸け橋となってくださるでしょう。

福祉部から

いつも福祉部の活動にご協力いただき、ありがとうございます。

早いもので今年も待降節の季節となり寒さが身にしみるようになってきました。今回も今年のこれまでの「食糧支援」に関するトピックスを二つ紹介したいと思います。

「食糧支援」は、水戸キリストの教会の方々が「アガペーミニストリー」と称して奉仕しておられる活動に、カトリック水戸教会も協力させていただく形で活動しているもので、毎月第２土曜日のお昼、水戸キリストの教会の集会室に路上生活の方を含む生活困窮者の方々に集まってもらい、作りたてのカレーライスを食べていただくとともに、炊きたてのごはんと当面の食料、生活用品や衣類などを持ち帰ってもらっています。

一つ目のトピックスは、衣類提供に関するものです。ときどき「食糧支援」に来られていたＡさんが、その日もふらっと水戸キリストの教会に来られました。Ａさんは路上生活の人ではないはずですが、なんと、その日はビニールシートのようなものを体に巻いただけの身なりだったのです。どうしてそのうような格好になったのか聞いても答えてくれません（答えたくない様子）でしたが、自分からそのような格好をするはずがなく、おそらく誰かに無理やり衣類を剥ぎ取られたのだと思われます。さっそく用意した衣類の中から背丈にあったものを探し、それを着てもらいました。Ａさんは、あまり表情を表に出さない方ですが、衣類を着て何かほっとされたように見えました。またＡさん以外にも、擦り切れて下着が見え隠れするようなズボンをはいて来られる方もおられました。これから増々寒くなっていきますので、食糧だけでなく衣料の提供もしっかり行っていきたいと思います。

もう一つのトピックスは、今年初めて「食糧支援」に顔をみせたＢさんに関するものです。Ｂさんは千葉県の生活保護老人施設に入っていましたが、施設側と金銭トラブルになり、そこから逃げだして水戸に流れ着き、橋の下での生活を余儀なくされてしまったそうです。いつも「食糧支援」に来られているＣさんが、そんなＢさんを町で見かけて「食糧支援」に連れて来たわけです。食糧提供後、Ｂさんのこれからの生活をどうするかが話し合われ、水戸キリストの教会の信者さんが関係する施設でＢさんを受け入れてもらうことで、その場でとんとん拍子に話が決まりました。「ありがたいことです」と、ぼそっとＢさんがつぶやくのが聞こえました。次回の「食糧支援」のときにＢさんが元気で顔を出すことを楽しみにしたいと思います。

このように「食糧支援」に来られている方々の中には、Ｃさんのように自分だけでなく、同じような弱い立場の人にも目を向けて行動される方もおられ、「食糧支援」に来ている人どうしの輪も築いています。また、水戸キリストの教会の方々の弱者へ親身に寄り添う姿勢、直ぐに行動を起こす実行力とその連携の強さには感服させられます。

福祉部では、「食糧支援」の活動に協力していただける方を募ります。「食糧支援」（アガペーミニストリー）主催元の水戸キリストの教会（プロテスタント）の方々とも繋がってみませんか？カトリック教会とは一味異なる雰囲気の中で、支援を受ける方々やイ

エス様の望まれることを実行されている教会の方々と会話したり、その行いに触れることは有意義なことです。

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」

マタイ 25 章 35･36 節

三位一体の聖体宣教女会の“目的と使命”

「サグラダ　ファミリア」　前号では、三位一体の聖体宣教女会の“起源と歩み”についてお伝え致しましたが、今回は、本会の“目的と使命”をお伝えしたいと思います。

三位一体の聖体宣教女会の目的は、以下に述べる方法によって、三位一体に栄光を帰すことである。

a）教会の生命の中心である聖体祭儀（ミサ）に参与しながら。：　それは

—キリストと共に自己を捧げ、会員の生活において人類のために犠牲を捧げ続け、

—イエスの祭司職とそれに参与するすべての司祭方の司祭職に感謝し、

—マリアが神の母とされたことを感謝する。

b）神に奉献された会員が聖化されることによって、

—公式に、有期または終生誓願をたて、貞潔、清貧、従順の福音的勧告を行い、

—共同生活を行い、そして、

—会憲を遵守することによって。

c）人々の間に神の国を広げるために働きつつ、キリストの福音的使命に参与すること。：それは、私たち自らが御父の礼拝者となり、礼拝者を探し求め礼拝者を養成することであり、礼拝者は洗礼による祭司職を知り、それに生き、御子によって御父の子とされた人々が、互いに兄弟姉妹となることである。

（会憲より）

本会の霊性の源泉は、聖霊に導かれて御父の栄光を熱烈に求めていた、パウロ・マリア・グスマン神父が、福音書（ヨハネ４章２３節）を通して、御父の礼拝者であるイエスを観想し、生まれたのです。

私たち自らが“御父の礼拝者となり、礼拝者を探し求め、礼拝者を育てる”使命を果たすことによって、三位一体に栄光を帰すことです。

ミサは、私たちの生活の中心です。ミサに生きる具体的な生活の中で、三位一体の聖体宣教女会の一つの特徴としているのは、顕示された聖体への不断の礼拝です。

常に御父との親密な一致のうちに、私たちも毎日１時間の礼拝を忠実に行い

特に神と親しく交わるために礼拝を捧げます。

創立者のグスマン神父は会員に語ります。“ミサについで、聖体礼拝の時間を、もっとも大切な時間としなさい。第一にイエスと一致するミサ、次に聖体礼拝の時間である。“

ミサと聖体礼拝は使徒職の源、宣教活動全体の源泉であり頂点なのです。

オータムキャンプ 2019

水戸市近隣のボーイスカウトが集まり、「生活しやすい気候の中で、スカウト技能向上を図るとともに、秋の味覚を楽しむ」という目的で、秋のキャンプを行った。

11 月 2 日(土)～4 日(月)にかけて、常盤神社の裏のスギ林の中に約 40 人のスカウトとリーダーが集った。

日曜日の夜には、雨が降ったりしたが、野営生活・計測・観察・ハイキング等の技能を高め、他の団との交流を図った。

スカウト大会

水戸市のガールスカウトとボーイスカウトの交流大会が、11 月 17 日(日)千波湖の「はなみずき広場」にて行われた。

高校生のスカウトが、半年をかけて企画し、小学生から中学生のグループを作って、竹の棒にパンを巻き付けツイストパンを焼いて喰らい、ゲームに共に興じ、年代・男女の差を超えて互いに励まし合い競争し合って、共に向上した。

岩本直美さん報告会

10 月 27 日に日本キリスト教海外医療協力会岩本直美さんの活動報告会を行いました。岩本さんはカトリック信徒の看護師で、1993 年からバングラデシュに派遣され障がい者のために働かれています。バングラデシュの首都ダッカの北約 100km のマイメンシンという小さな町のラルシュ・バングラデシュのコミュニティ・リーダーとして、3 つの障がい者のためのハウスを運営されています。

バングラデシュのような開発途上国では、社会福祉のシステムが非常に脆弱です。心身に障がいを持った人たちは、自宅の座敷牢のような場所に閉じ込めていることも珍しくありません。あるいは家族に捨てられ路上生活を送っている人、無実の罪で刑務所に収監されている人もいます。ラルシュ・バングラデシュでは、そのように捨てられた人々をラルシュのホームに受け入れ、アシスタントとともに共同生活を送っています。

無実の罪で 5 年間刑務所に入れられていた障がい者を受け入れ、6 年もかかってようやく自分でコップを握って水を飲むことが出来るようになったこと、路上生活からラルシュのホームに来て、12 年かかってお腹がいっぱいになるとはどういうことかを学んだ障がい者、あるいは障がいを持った子のお母さんが、子どものおかげでつまらないことにうつつをぬかさず神様に祈り続けることが出来たこと、世話をしたのは母親ではなく、子が母を守ってくれたということに気づかされたことなど、ラルシュ・バングラデシュで紡がれた福音の物語をたくさん聞くことが出来、大変感銘をうけました。ラルシュの働きは、イエス様や教皇様の行動と全く同じく弱い人、助けを必要とする人に寄り添う愛の実践だと思いました。